

徬徨

— 第八号 —

昭和27年3月

都立西高山岳部

巻頭言

二B 加藤鈴夫

旧制中學生として入学され現在の山岳部の基礎を確立してくれた三年から新制中學生卒業の我々の手に運営がまかされることになった。山岳部も道にのり今回新たに発足したNACの協力で大いに活躍出来ようである。運営がまかされたのを機会に我々の行動を反省して見ようではないか。山岳部と云うものは、ただ漫然と山に登る人々の団体ではない。或目的を持ち、皆で協力し一つの目的に向かって行く所作である。しかし現在の部員の態度を見ると唯山行に参加すればよいと云う態度であり、部の運営発展には望んでいない。又各々が部員としての責任を持った行動をとらねばならないと云うことを自覚しなけりなう。そうして部員である以上、少しでも部の発展に努力を致すべきであり、積極的協力が必要である。とあると私は信ずる。又それなくして部の発展成功は期待出来ない。

公式山行

お四十二回 つづら岩

〔期日〕

〔パーティ〕

〔コース〕

五日市—平澤 笹田
 千足沢支流—茅倉根—千足—千足沢—
 千足上見台—千足水源—千足

この日は朝から雨が降っていた。私と平澤は傘を持って凡流を岩登りを企てようとしたりしたのである。街道から分れて沢筋に入る。進行中本流からそれて間違えて右の枝沢へぐつとつ、こんでしまった。悪戦苦斗の末尾根へ出る。その尾根は馬頭川尾根の枝尾根であつたのに馬頭川尾根と誤認してしまつた。右へ下りる事数分間違ひに気がつき、左へ行く。やがてつづら岩についたが、我々には岩を登る体力が残っていなかった。おぐ帰る事に決し富士見台から千足沢を走る袂に下る。

里につきやつと人心がつく。雨の中ではあつたが今では結構な山行であつたと思つてゐる。

(一)

(笹田記)

お四十三回 大菩薩山嶺

〔期日〕

〔パーティ〕

〔コース〕

十月二十三日—二十四日
 L加藤 SL岩堀 佐藤 秦
 福田 下出 戸田 関谷 斎藤
 (コース、多分) 才一日(雨) 立川(六・五) — 永川(七・三)
 — 八ッ丹波(二・三) — 船越橋(二・二五)
 三茶小屋(十二・四) — 伊食(二・二五) — 小室谷
 出合(一・五・五) — 大蔵茂谷出合(二・五〇)
 — 泉水谷造林小屋(四・〇〇) 宿泊
 才二日(晴) 小屋(七・二〇) — 十文字峰
 (八・〇) — (二・五〇) — 丸川峰(二・三四五) —
 大菩薩嶺(二・五〇) — 大菩薩峰(二・四四)
 — (三・一五) — 長川峰(四・二五—四・四五)
 — 番屋(五・四〇) — 八ッ塩山(六・二〇) —
 六・四〇) — 立川(六・三五)
 大鍋(一) ナタ(二) ランタン(二) 鋸(一)
 懐中電燈(三) 雨具その他

〔準備〕

水川からのバスで戸田がよつてしまつた。丹波で下車し秋雨にぬれながら林をトツプに青梅街道を歩く。途中三茶小屋で昼食をとる。熊の出没話をききながら腹を満す。雨は小降りになりつづけたが、黄世末のみみじの故か道は意外に明るい。

こねうわと山腹を捲き、溪流の音が静寂を破つているのをうるさい程にききながら雨の中を黙々と歩く。紅葉と溪流の音とつた趣きのあるコースをとりながら夕方に近くなり

菅林署の小屋上つく。

明日の天気と云にしながら夕食にカレーライス
をとり一固寝につく。

(三日) 泉谷小屋より番屋

おじやの朝食をすまい 雨どりの道を谷沿いに進

む。固もなく十文字峠についた。——しかしこの

時は誰もが足川峠だと思ひ疑う者がなく、三つに

分れていゝ道の内左の道をとる。けつきり

した道口やがて沢に入つて消える。不思議に思

い沢沿いに倒木を分けながらとへとへと進み

属根に出まうとしてエ砂崩水の急斜面を直登

すると道があつた。やむをえず右に行く

とさつき十文字峠からの下り道に出まうした。

意見も出たがはつてりせず、とにかゝ元の峠まで

もどり晝食をし、今度は中央の道をとつたが

駄目でもどり、今度は右の道を進む。皮肉

なことにこの道をとつた時始めて今までの所

は文川峠で正しいことに気がついた。

途中 泉谷小屋からこの道と合して晝食を

したくなりそうに文川峠でつた。

山麓の道を狭く狭く歩みながら進んだ。

道はかたなり長く熱せられた。大菩薩は高い

視察に行つたりした。

ニルから雲峰峠の近くまでV字形にえぐ

られた道で歩き良くなる。バスの事が気になつ

て西高山兵部の特徴であるマラソンが始まつた。

反省

ニB 加藤 鋡夫

三年の手から離れ一二年だけの山行であつ

たが結果は残念ながら失敗と言わざるを得ない。

オリングワングデルングにつつて自分からリドターと

の研究判断等に急遽で及んだことは深く反省

してゐるところである。又雨等の場合を考へると

恐しい感じを感ずる。此言がリドターにまかせると

いつのころは行く自分でもエースの研究をしようとした。

又、一般に基本的な事と例へば、地面の見方、火のたき

方、飯の作り方、百と非常中に不足するものが

減せられた。

しかし此は欠兵を欠兵と云つてはいいけれども

欠兵をよく理解し批判して来たるべき山行に於て

くりかえさぬばかりがそれをも有効に活用しなけれ

ばならないのである。この山行は欠兵を欠兵ではな

瞬間厳守による最速刻の行い。山の命令

に服従。ハテなかつた。等である。

その欠兵では成功と言へるかもしれない。

二小時の登山に大切な要要素がリドター、パーティー

の山行技術の欠兵をいく分でもカバーして行く

かたと思つてゐる。

以上

個人山行



十文字峠より金峰山

〔期日〕

十月二十三日と二十六日

〔パーティ〕 中野・鈴木・田中稟。

〔コースタイム〕 第一日(雨) 新宿(二・五五)―小淵沢(五・三三)―信濃

川上(八・四〇)―梓山(九・四五)―八丁坂(一〇・〇〇)昼食―十文字峠(一・四五)

―十文字小屋(三・二〇)

第二日(晴) 小屋登(六・四五)―大山道(七・三五)―大山(八・五〇)朝食

―五牙峠(九・〇〇)―三空山(一〇・五〇)―三空岩(二・三〇)―甲武信岳(

一・四五)―富士見(二・四〇)昼食―富士見台(二・二五)―落葉松久保(三・

二〇)―石塔庵入口(四・二五)―西沢入口(五・二〇)―國師岳(五・五〇)―大池

小屋(六・四〇)

第三日(晴) 出発(七・〇〇)―朝日岳(八・二〇)―金峰山(九・二五)―片手廻(

二・三〇)―沢に出る(小屋跡)(二・三〇)―塩山分岐(二・五〇)―水晶峠(三・二五)

―一中倉(一・五〇)―物見台(二・三〇)―一本松(三・二五)―沢と出会

う(三・三三)―上黒平(四・五)―御岳(五・五五)―天神森(六・五〇)

第四日(晴) 出発(八・四〇)―バス甲府(九・五)

この山行の意義は大きい。存せむらばリニツクも下ろしてナイゲル

おぬいでから三峠同様に、全校クラス・マツウの野球快勝は我がカラ

スの勝利に終り、全種目総合優勝カップは私の目の前に響と輝いたか
らである。

〔第一日〕 記念祭最終日の午後、新宿駅出発。例によって中野はバス

で行く。約十米の小雨まじりの強風のため甲武信岳頂上を断念し、十

文字小屋に下る。

〔第二日〕 「お山は晴天」、三人はいたってのんびりである。倒木は夏の

三倍以上もある。大池小屋六時四十分着。床にはないが薪は豊富。

〔第三日〕 一人四時間しかおぼろげに、いよいよおこがれの金峰へ、

終バスに間に合わず天神森駐在所でとめてもらう。

〔第四日〕 天神森バスで甲府、一路東京。

〔詳細は記録帳を参照して下さい。〕

〔反省〕 先づ天神森で終バスをつかみをとめた事。四時五十分が最終

である。その前に清川橋から一台出るのが同じく四時五十分。我々は

これに二十分おくれた。これは金峰頂上ですつと腰をあげればよかつ

たので赤面のいたり。次に先一日甲武信小屋の予定を変更し、十文字

小屋といたこと。時間的には二十五年度の例と大差なく甲武信小屋

に間にあったはずだが何しろものすごい強風と倒木である。この場合

三人共昼食にむづかしたとたん強風で体温を奪われ回復しなかった。十

文字にエンコしたことは今でも良かったのではないかと思つてゐる。

又、個人山行と云ふゆるみもあり、たしかにすべこの奥にたるんぞい

たことはい、年をして面白くない。

(リーター 中野英司記)

三頭山

〔期日〕 十月二十二日 (曇)

〔パーティ〕 岩堀 (単独)

〔コース・タイム〕 氷川(七三〇)―氷川山荘(八四〇)―河内(九二五)―小屋(一〇四〇)―数島峠(二〇五〇)―西峰(二二〇二)―数島峠(二二七二)―御前山(二二五二)―氷川山荘。

一人の山行はつまらないうし、又何と存くさびしい。心が暗々としな
い。何処かに不安が潜つてゐる。こんな状態では山へ来た甲斐が有ら
ない。晴れて美しい景色を得ても共に分つ人が居ない。まして曇天の暗い
道に於ては。途中、河内におけると五十円取られるので泣き御前まで
足をのぼした。中華をば高いから喰うのはやめた。諸兄が先に青梅
街道の駅から少し青梅よりにもどつた所に母いとは屋のある事を教え
ておいてくれたらと残念至極也。そこで後輩のために書残す次第。次
の日は雨だったが駆送行くと皆が居た。うれしかった。(岩堀)

越 澤 (第二次偵察)

〔期日〕 十一月四日 (晴)

〔パーティ〕 田中(将)、平沢

〔コース〕 鳩ノ巣―越沢部落―越沢―琴平山―大塚山―琴平山―鳩ノ巣

ノ巣

〔装備〕 サイル(三十米)、ハーケン(五本)、ハンマー、すてんわ

その他

第一次偵察で大塚のことが分つたので今度もこのまゝ帰るの付非常に
残念と云うので近くの岩でアウフザインの練習をしたり、大塚山
へ行ったりしてゐるうちに日が暮れかゝつて来たので下り始めました
(平沢記) 〔詳細は記録帳を御覧下さい。〕

閑人の寝言

岩野舟夫

本号の編集後記を御覧下さい。はつきりと大幅なる削減をお
説びします。と書いてあるではありませんか。それ存のにこの頁
の二の欄には存んと又くだらな、全く閑人の寝言の祿ふことが
書いてあるではありませんか。しかし皆さんお許し下さい。これ
も今固の男子川南陸縦走をひかえて、経済的の理由から編集、原
紙切りを分担したが後に生じた産物存ののですから……。
本誌にまだ「寝言」と云う立派な名刺のついでいなかつた頃、
そうである一昨年もおのことで、私が森沢、田中(実)両君
に部報の編集をおゆかりして以来、今に存つて全く久しぶりにこ
の編集にたづさわつて見たのですが、そこには懐かしさと共によく
もこれまで発展して来てくれたものだと思つて居る。後輩諸氏に対する感
謝の念が湧かざるを得ないので。部報の内容、編集の方法、部
内の融合、何一つとして退歩してゐないもの存ないので。そして
今やこの部をかゝるまで発展せしめたお如に近い三年部員が果敢と
うとしてゐるので。現役部員がこれらの人達の事業を祝福する
と共に、この偉業をせひとも継承し且つより以上の発展を約して
頂きたいものです。又我々はこのことを迎えて、お念に新勢力を得、
現役に對する援助協力を更に一歩促進せんと望んでゐるので。
窓の外には明かるい希望がみちみちてゐます。春はすぐそこま
でやって来てゐます。そして私達の新しい活動がまづは始らん
てゐるので。

武甲山

期日 十一月四日

〔六ノ一〕 河合(単独)
〔三ノ一〕 飯能―各郷―尊首峠―武甲山―お花畑

合子で歩かして武甲山とていふ内は、この山に
お花畑の難易は、杖渡が蔵の北の山で一日休
日であるといふ。三神をけし、工部我の山と非
よはりである。

越沢 (才次偵察)

期日 十月二十五日

〔六ノ一〕 平沢
〔三ノ一〕 古里駅(一・三〇)―越沢通行―御
岳部落(三三〇)―大塚山―御岳駅

はじめは川苔谷へ行くつもりで、たか都合で計画を
変更した。

目的のバットレスは下から見ると五十米位にしか見えませ
んが実際は八十米です。

結局偵察もものにならず、「もう単独行なってい
やだ。オレは気が弱い人だなあ。」と思つたのでした。

(詳細は記録帳にあります) (平沢勇記)

陣馬山

期日 十一月二十三日

〔六ノ一〕 佐藤(その他三名)

〔五ノ一〕 与願―吉野町―落合―栃谷―陣馬
山―明王峠―景信山―小佛峠―城山―高尾
山―浅川駅

勤労感謝の日の休日を利用して、早く山行を行
て来た。

鶏の鳴声、山裾の草や、湖上にもある一縷の光線、箱
庭の風景、軽いつかしの後の食事、すべてがのどかでた
の、山行でした。

(佐藤亮弘記)

海沢

期日 十月二十五日(晴)

〔六ノ一〕 福内 下出以下一入生徒多数
〔三ノ一〕 白丸―海沢橋―天地球出合―亀ヶ池
―三釜滝―ネジレ池―大滝―不動
滝―杉木沢出合―大岳―いし穂根
―氷川

白丸からの青梅街道を歩き、海沢橋を渡り
登電所のある坂を抜けて道を海沢通行路にとる。

才一滝、坂の少い所で大休止をとり昼飯。

食後三釜迄の通行を計画し、即時実行につ
つす。

天地球の出合より急に坂は暗くなり両岸が
くっきりと迫ってくる。井戸沢の出合の天狗岩境

の下を通って才二の堰根の右岸を越え、と坂
はくっきりと明るくなり、そのまゝの状態で三釜滝

まで来る。三釜の境を直登し、いよいよ休止の後、
八尾根を帰途にとつた。

(福田記)

○第(四)例會 大菩薩 報告 (十一月十一日)

NAC 初めての山行を霧積ときめて通知を出してからいざメンバ
 決定になると日の悪かったのも手伝って中川頼神岳高湯と云ういつ
 もの四人組だけになってしまった。その上まで出発と云う前の日の晩
 とんでもない電話がK君から僕所へかゝって来た。霧積はつまら
 ないから大菩薩にしようかと云うのだ。それだけ無茶だ。と云つても
 今晩十時に新宿へ来なければ三人で行つてしまふと云う恐迫にも近い
 話、仕方なくお供することになつてしまつた。新宿に行くことと愛蔵一
 もいっもの通りのせいたく存気持が芽をふいて準備で行こうと愛蔵一
 決、しかしともすいていて快適でした。塩山についたのは真夜中の
 十二時半、駅にいても仕方がないからすぐ歩き出して番屋に三時につ
 いた。今から山径にかゝつても仕方がない云うわけでは道はたの岩かげ
 で頭から雨具をかぶつて寐てしまふ。どうみてもあんまりいゝかつこ
 うではない。四時半に番屋を出発、上日川峠に向う。紅葉の時期には
 少しおとすきた。で、丸坊主に近い。しかし天気はよく雲は一も存
 く見下す甲府盆地、朝日に輝く南アの姿は格別だった。朝飯を頂上で
 食べようとする考をみこしたため腹がへつて頂上への最後の登りがと
 てもつらい。それども氷川の競人競争の雄、神龜中山ののっげの二人
 は八時半さつかり大菩薩嶺の頂上に立った。ところが高橋川瀬の凸凹
 二人組は腹がへつて動けず、さりとて朝飯は前の二人が先に頂上へ付
 び上げてしまったので途中で食べられずうらうらう云つて丸坊主く
 なつてあがつて来た。頂上からの富士の展望はすてきだった。十一時
 半出発、峠におり更にピークを一つこして石丸峠へ出て、こゝから日
 川の谷を下った。こゝでもせげいゝのに日川の谷の谷に下つたもんだ
 から怪が全くなく(五万の圓の径ほろをです)能登のやぶになやま
 此谷に下りては川の中におちたり難行苦行一時回半やつと嵯峨塩釜泉
 の少し上で本道に合さつた。時間が早かつたので鉱泉に入つて、つか
 れを休め(一人三十円)夜道を初鹿野に下り終列車で無事帰京しまこ
 た。当日四人の服装はだれ一人としてまともなものはなく、下届のべ

レ帽を筆頭に背広の下着だけだったりジャムパーまであったり、たん
 だんインキ登山に似て来る様でこれでは今にアロハのキツネでも着
 かねないですね。摩枝を出て一二年たつと二人亦姿をしてみたいらし
 く少年期(と云うと現役に失礼ですが)君達はまだ少年保護法の適用
 者で成人じゃないのですからね)から青年期への過渡期の現象がもし
 見ませんか?

理江初鹿野から天目山を過つて嵯峨塩釜泉の上までトラウツ道路が
 出来て居ります。(部分的に未完成の場所あり)嵯峨塩釜泉はあま
 りきれいな宿屋ではなく、その上鉱泉まで旅館から六十段位階段が
 あります。しかし宿賃は安いでしょう。アベツキにはむかない様で
 す。念のため、日川荘はまちがつても歩きかたがけんめいです。
 夏に川の中に入るつもりなら別ですが。急いでも日川尾根を通
 べきでしょう。(中川記)

後記 編集

- ◎ O. B. の方々及び筆者諸氏の積極的協力を感謝す。
- ◎ と共に、大幅な削除をお詫びします。
- ◎ 本号記載中の二単独山行の施行者が各々単独行
 を否定していることは考へべきことであると思ふ。

彷徨 第八号

—— 非 花 品 ——

発行兼 責任者 加藤 鈴夫
 編集者 齊藤 下出、秦

発行所 都立西高寄附校 山岳部
 東京都杉並区大宮三、一八
 電話 教養(三)三一八六

昭和廿七年二月廿九日印刷
 昭和廿七年三月一日発行